

平成18年度病害虫発生指導情報

対象病害虫：イネ・フタオビコヤガ（イネアオムシ）

平成18年6月20日

鳥取県病害虫防除所

1 情報の内容

6月19日現在、県内巡回調査定点において、フタオビコヤガ（イネアオムシ）が平年に比べて極めて多く発生しています。今後、7月上～中旬頃より発生する次世代幼虫の被害が懸念されますので、今後の発生状況に注意してください。

2 発生状況

- (1) 巡回調査の結果、フタオビコヤガ（イネアオムシ）の発生ほ場率は15.5%で、平年（発生ほ場率0.1%）より極めて多い発生となっている（表1）。特に、昨年の発生が多かった東部および西部地区では発生ほ場率が極めて高い。
- (2) 6月19日現在、本虫の発生は、箱施用剤未施用ほ場、鱗翅目害虫に対して効果が高い箱施用剤を使用していないと思われるほ場、周辺より早期に移植したほ場で認められた。しかし、成虫の移動性は高いため、現在発生が確認されていないほ場においても次世代幼虫の被害が発生することが懸念される。
- (3) 6月19日現在、ほ場での発生の主体は、老齢幼虫と蛹である。したがって、次世代幼虫は7月上～中旬頃より発生し始めると考えられる。
- (4) 農業試験場内の県予察ほ場（害虫無防除田）における本虫の食害株率は12.0～92.0%で、平年と比較して極めて多い（表2）。また、6月14日現在、発生の主体は老齢幼虫および蛹である（表2）。

表1 巡回調査定点におけるフタオビコヤガ（イネアオムシ）の発生状況

地区	調査地点数（調査ほ場数）	発生ほ場率（%）
東部	12(162)	14.2
中部	6(80)	5.0
西部	12(151)	22.5
県計	30(393)	15.5
平年	30	0.1

表2 県予察ほ場におけるフタオビコヤガ（イネアオムシ）の発生状況

ほ場No.	移植日	品種	食害株率（%）	食害株率 平年値	寄生幼虫数（頭/株）				蛹数
					若齢	中齢	老齢	合計	
1	5月19日	コシヒカリ	92.0	0.0	0	0.1	1.0	1.1	0.6
2	5月23日	コシヒカリ	44.0	0.0	0	0.3	0.4	0.7	0.1
3	5月30日	おまちかね	12.0	0	0	0.2	0	0.2	0

注) 調査日：6月14日

調査方法：1ほ場50株について食害の有無、幼虫数および蛹数を見取り調査した。

3 フタオビコヤガ（イネアオムシ）の生態

- (1) 蛹で越冬し、5 月上～中旬に第 1 回目の成虫（越冬世代成虫）が羽化する。多化性の害虫で、本県における 1 年間の発生回数は、中・平坦地で 4～5 回、山間地では 3～4 回と考えられている。
- (2) 稲を食害するのは幼虫のみである。若齢幼虫の食害量は少ないが、幼虫が大きくなるにしたがって食害量が急増する。また、発育が早く、夏季の幼虫期間は約 2 週間であるため被害の進展が早い。
- (3) 本県では、6 月上中旬に発生する幼虫の食害が問題とされていたが、昨年は 7 月中旬～8 月上旬に発生した幼虫の食害が問題となった。今年も同様の状況になると予想される。
- (4) 多発しやすい条件は以下のとおりである。
 - ア 繁茂度が高く軟弱なイネ、あるいは、周囲より生育が遅く葉色が濃いイネ
 - イ 山間地や山沿い等の風通しが悪いほ場
 - ウ 若齢幼虫期間に曇天や雨の日が多く、湿度の高い日が続く場合

4 フタオビコヤガ（イネアオムシ）の被害のようす

- (1) 若齢幼虫はイネの葉の表面を片側から食害するため、かすり状の食害痕を残す（写真 1）。
- (2) 幼虫が大きくなると葉の両側が不規則な階段状に食害され、激しい場合は葉の葉脈のみを残して食害する（写真 2）。



【写真 1】



【写真 2】

5 防除上注意すべき事項

- (1) 6 月 19 日現在、本虫の防除が必要なほ場は極少ない。しかし、東部地区および西部地区では激しく食害されているほ場が散見されるので、老齢幼虫の発生が特に多い場合は、防除指針等を参考に粉剤あるいは乳剤で早急に防除を行う。
- (2) 7 月上～中旬頃より発生する幼虫は昨年と同様に多いと予想されるので、発生状況には十分注意し、発生が多い場合には防除指針等を参考に防除を行う。
- (3) 防除適期はかすり状の食害痕が見られる時期（若齢幼虫期）である。
- (4) 幼虫の食害量は大きくなるにしたがって急増するため、散布時期が遅れた場合（老齢幼虫主体の場合）は粉剤あるいは乳剤で早急に防除を行う。